
人生で 1 / 1 の嘘

I f

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生で1／1の嘘

【Nコード】

N3780F

【作者名】

I f

【あらすじ】

嘘が大嫌いで今まで一度も嘘を吐いたことのない私。だけでも、人生最初で最後の嘘を私は吐いた。その嘘は大好きな優君のために。私は人生で1／1の嘘を吐いた。

私は正直者で、今まで嘘を吐いたことがない。

どうやら、嘘を吐けない性格みたいだ。

そのせいで、ポーカーやババ抜きで勝ったことがない。

だけど私はそれでいいと思ってる。

嘘は嫌いだ。

確かに世の中にはいい嘘もあるのだが、それでもわざと間違った事を言うのはおかしいと思う。

嘘が人の為になるとは思わない。

そんな訳で、私は嘘が大っ嫌いだ。

だけど私は嘘を吐いた。

人生で一度きりの些細な嘘を……

私はその時、好きな男の子に告白しようとしていた。

優君というクラスメートの男の子だ。

確かあれは一目惚れだった様な気がする。

だけど内気な私は告白する勇氣もなくて、そのまま三ヶ月もずると引き延ばしてしまった。

そんなある日、このままではダメだと思い、私は思い切って告白することにしたのだ。

そんな訳で優君を呼び出したのはいいが、いざ告白となると、緊張して言葉が出なくなった。

私はそんな緊張に打ち勝つ為に何度も「このままの自分じゃダメだ」と自分自身に言い聞かせから口を小さく開いた。

「あの……」

「何？」

優君の優しい瞳が私を見つめる。

私は思わず言葉を失う。見つめられるのが恥ずかしい。告白する

のを止めたくなる。

だけでもう一人の私が折れそうな心を支えてくれる。
言わなくちゃ。好きって、言わなくちゃ……

「あ、あの……私、一目見た時から優君の事好きで、その……」

「ゆ、優君の優しいところとか、明るいところがとても羨ましくて……」

「……」
「だから……その……」

ダメだ。恥ずかしい！ もう止めたい！ でも優君は私の事見てくれるし、ここまで言えたんだ。だから……

言わなくちゃ！

「あ……わ、私と、つ、つつ付き合ってください！！」

……言った。言い切った！ 私遂に言えたんだ！ ああ、顔が熱い！ でも、言えたから満足だ！！

優君は私の言葉を聞いて何やら考え込んでいるみたいだ。

付き合ってくれるかな？ でも最後まで言えたから……きっと大丈夫。

しばらくして優君が口を開く。私はそれまでの時間に永遠を感じた。

「あの……」

「な、何ですか？」

優君が返事を口にする。私は自然と目を瞑った。

「ゴメン……」

「えっ……」

何、優君は今何て言ったの？

「俺、他に好きな子がいるから……」

優君が申し訳なさそうに頭を下げる。それと同時に、私の頬を熱い雫が伝った。

断られたのでも、そういう理由があるなら仕方ないと思う。でも

……何でだろう……

涙が……止まらない。

私が何度も手で拭っても、それは止まることなく流れ続けた。
優君が困った顔をしながら私に近づいてくる。

きつと優しい優君のことだから、私の事をとても心配してるんだ
ろう。

何とか彼に心配をかけないようにしなくちゃ。

止まれ！ 止まれ！ 涙よ、止まれ！

私はそう言い聞かせながら再び手で拭うが、やはり止まらない。

この涙を止めるのは、無理だと思った。

じゃあ、どうしよう……

何をすればいいのだろうか？

私は無駄だと分かりながらも、止まらぬ涙を手で拭いながら優君
を心配させないことだけを考えた。

……そうだ。

嘘を……吐こう。

優君に心配かけないような嘘を……

本当は嘘なんか大嫌いだけど、それで優君の心配事がなくなるの
なら……

私は決心すると、涙を完全に拭い去り、優君にへたくそな笑顔で
微笑みかけた。

「……ありがとう……」

さあ、最初で最後の嘘を吐こう。

「スツキリした！」

もやもやした自分の心を騙しながら言った。

「私の気持ちを伝えられたから全然悔いないよ」

悔いの残った心を持ちつつ、正反対のことを口にした。

「もう泣いたりしないから……」

今にも零れそうな涙を耐えながら言葉を紡いだ。

「大丈夫だから……心配しないで……ね？」

今にも崩れそうになりながらも、唇を噛み締めた。

優君は私が嘘を吐いている間、終始不安そうであったが、私が嘘を吐き終わると、頷いてくれた。

きつと優君の心配は少しも取り除かれてないだろう。

それでも物分りの良い優君であるから、きつと頷いてくれたのだ。

「じゃあ、また明日」

優君はそう言っと、私に背を向けた。

「うん、じゃあね」

私は手を振りながら、気にしてないようなふりをした。

振り向き際、優君が一瞬心配そうな顔をしたのは、きつと私の目に溜まっている涙に気付いたからであろう。

それでも彼は振り向き、私の元を後にした。

去っていく優君を見て、私はその場に泣き崩れた。

優君にふられた悲しさもあつたが、それ以上に嘘を吐くことしか出来なかった自分が悔しかった。

人生で1分の1の嘘は、初恋と共に去っていった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3780f/>

人生で1 / 1 の嘘

2011年1月19日13時09分発行